

1. 公園ねっとわーくの活動

2000年、札幌市東区のまちづくり活動の際に、公園で子どもの声が聞こえないということが指摘され、それをきっかけに「公園ねっとわーく」が誕生した。公園の問題を市民目線で考え、より活用しやすく、活用されるものにしたいと、市民と行政をつなぐ役割を担う活動を始めた。活動を始めた頃の主な公園利用者は、子どもとお母さん達であった。子ども達が公園に出てくるようにするプログラム、雪に埋もれる冬の公園を活用するプログラムなどを企画して実施している。

2. 冬の公園 健康・防災・体力づくりのすすめ

様々な活動を行う中で、「冬のまちにスノーキャンドルの灯りをともそう」というイベントが誕生した。冬の公園の活用、冬の災害時の公園の機能、冬の子ども達の体力作りを考えることを3つの柱として2003年から始めた。冬の戸外で、共同作業でスノーキャンドルを作った。雪景色にともる灯りはとても美しく、幻想的であり、感動を皆で共有できることが評判となり、活動の輪が広がった。現在は、札幌市内にとどまらず、石狩市、旭川市などの公園を会場に、様々な団体や公園管理者、市民が参加して開催されている。13回目の開催となった今年1月17日、阪神淡路大震災から20年目を迎えた。

冬の札幌で大震災が起こったらどうなるのか。雪が積もり寒い戸外で過ごすためには、そのための知識や知恵が必要である。雪の中で怪我人や障害者を移動させることも生じる。2010年冬、北方圏体育・スポーツ研究会の須田先生をはじめ、北海道大学大学院教育学院体育科学ゼミの水野先生や学生と一緒に、冬の公園において、「災害時の自助・共助に必要な体力や知識に係わる実験」を行った。動くことができない人を雪上で搬送することの難しさ、長靴を履いて雪の中を動き回る時の体力の消耗を実感した。冬、戸外で遊ぶことが少なくなった札幌の子ども達の体力低下が問題となっている。交通事情や雪捨てなど、安全上の様々な問題があり、子ども達は冬、戸外で遊べないのかもしれないと考えた。そこで、冬の公園での遊び方と子ども達の体力づくりについても研究した。

以上の成果を基に、2011年3月に、「冬の公園 健康・防災・体力づくりのすすめ」というパンフレットをまとめた。その頃、東日本大震災が起こった。冬の札幌での災害も他人ごとではなくなってきたとの想いが強くなった。

3. キッズパークからシニアパークへ

近年、公園利用者に変化が見られる。子育て世代の家族が郊外に一戸建てを構えて生活の場を築く一方で、仕事をリタイアした夫婦が除雪の必要が無いマンションを求めて都心に移り住むケースが増えている。札幌では、大通公園周辺や創成川イーストと呼ばれる創成川通りから東側の地区に立ち並ぶマンションに、そのような高齢者が多く住んでいる。彼らは除雪から解放されたものの、庭を失い、土に触れる機会も少なくなった。

大通公園や創成川公園において、花壇の花苗植え、花がら摘み、樹木の剪定、清掃などの維持管理作業、公園のガイドツアーなどのボランティアを募集すると、近隣の高齢者が集まってくる。都心部の他の公園でも同様の状況が見られる。彼らは、公園という場での活動を楽しんでいる。そして、社会貢献活動に励む姿が他の公園利用者から賞賛され、生きがいを感じている。同じ趣味嗜好を持つ仲間と出会い、交流し、家に引きこもることなく健康を維持している。

少子高齢化が進み、30年前に14歳以下人口が65歳以上人口の2倍を超えていたのに対し、現在では65歳以上人口が14歳以下人口の2倍以上となり逆転している。地域居住者の年齢構成が大きく変化したことに伴い、利用者が子どもから高齢者主体に変化した公園も多い。

平均寿命は男性80歳以上、女性85歳以上となり、60歳で定年を迎えた後20年以上も過ごす人が多い。これらの人々が、コミュニティ活動、ボランティア活動、健康増進活動、ガーデニングなどの多様な活動を行う場としての公園の需要も高まっている。

4. おわりに

お母さんが初めて子どもを公園へ連れて行き、利用者の仲間入りをするを「公園デビュー」という。近年は、仕事をリタイアした人が、楽しみと生きがい、そして仲間を求めて「公園デビュー」をしている。公園は、周辺地域の居住者の変化、環境の変化、社会的要請の変化に伴い求められる機能が変化している。この変化に合わせてソフト・ハードを常にリフレッシュしていく必要があると感じている。

子育て、防災、高齢者の健康、地域コミュニティの場として大いに公園を活用していきたい。

(NPO法人 公園ネットワーク代表理事 中村佳子)